

みんなで支える、地域生活のカタチ

社会福祉法人恵和 恵和青年寮
早坂 亮

内容の構成

1

国（もしくは住まいの検討部会）が
示す行動障害のある人への支援体制
【恵和青年寮の取り組み】

～事例報告～



国の方針・制度



住まいの検討部会



支援体制の整備



本人の強心・安定した生活

2

その行動は「困っています」の訴え



困っているよ…
助けてほしいよ…



そうだったんだね。
一緒に考えようね。

3

行動障害がある方の「特性配慮」



見通しを持てる工夫



刺激の調整



わかりやすい言葉かけ



本人の強みの活用

4

地域みなさまにお願いしたいこと
『予防的支援の重要性』



見守り・声かけ



困りごとの早期発見



関係機関との連携



安心して暮らせる
地域づくり

自己紹介



早坂 亮
(はやさか りょう)



資格

- 社会福祉士
- 保育士



職歴

- 児童養護施設 保育士・児童指導員



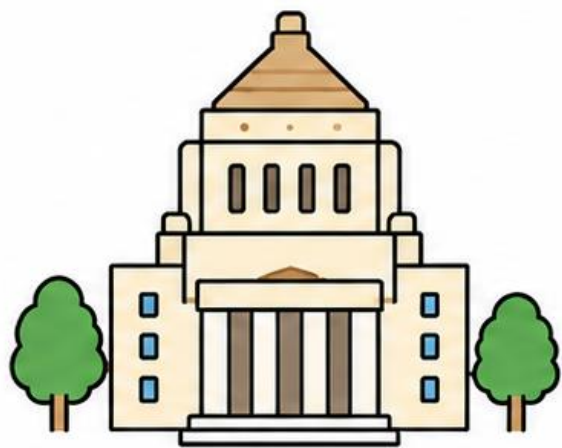
- 障害福祉サービス事業所 生活支援員



- サービス管理責任者・中核的人材



1 : 国（もしくは住まいの検討部会）が 示す行動障害のある人への支援体制 【恵和青年寮の取り組み】



国・検討部会



支援体制の検討・提示



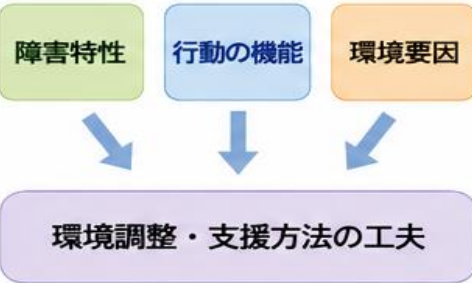
行動障害のある人への
支援体制の整備・実施

集中的支援とは

状態が悪化した強度行動障害を有する人に対して、地域全体でチームを組みながら、
短期間（原則3～6カ月）で集中的にアセスメント・環境調整・支援方法の整理を行う支援です。

標準的支援の考え方

本人の障害特性・行動の機能・環境要因
をアセスメントし、行動を引き起こして
いる環境を調整する支援を行います。



集中的支援の目的

① 状態悪化の立て直し

他害・自傷・パニック・生活崩れなど
に対して、短期間で環境調整を行い、
生活の安定を目指します。



② 本人理解を深める

何に困っているのか、なぜ行動が
起きるのか、どんな支援が有効か
を整理します。



③ 地域で支え続けられる体制づくり

集中的支援は「一時対応」で終わり
ではなく、支援方法を地域へ引き
継ぐことが目的です。



集中的支援の2つの型

① 事業所訪問型

広域的支援人材が利用して
いる事業所・生活場所へ
訪問し、現場支援者と一緒に
支援を整理します。



行うこと

- ・アセスメント ・環境調整
- ・支援方法の整理 ・チーム支援の助言

② 居住支援活用型

一時的に生活場所を移し、短期入所・
施設入所・グループホーム等を活用して
集中的支援を行います。



特徴

- ・環境を変えて再アセスメント
- ・状態安定後に元の生活へ戻る
- ・支援方法を地域へ引き継ぐ

関わる主な人材・機関



広域的支援人材

地域を支える専門人材。
助言・アセスメント・計画作成・
環境調整・支援整理を行う。



中核的人材

事業所の中で標準的支援を実施し、
支援を統一・チームをマネジメント
する現場の中心となる人材。



事業所・支援チーム

日常的な支援を提供し、支援計画
に基づいて支援を実施する。



相談支援事業所

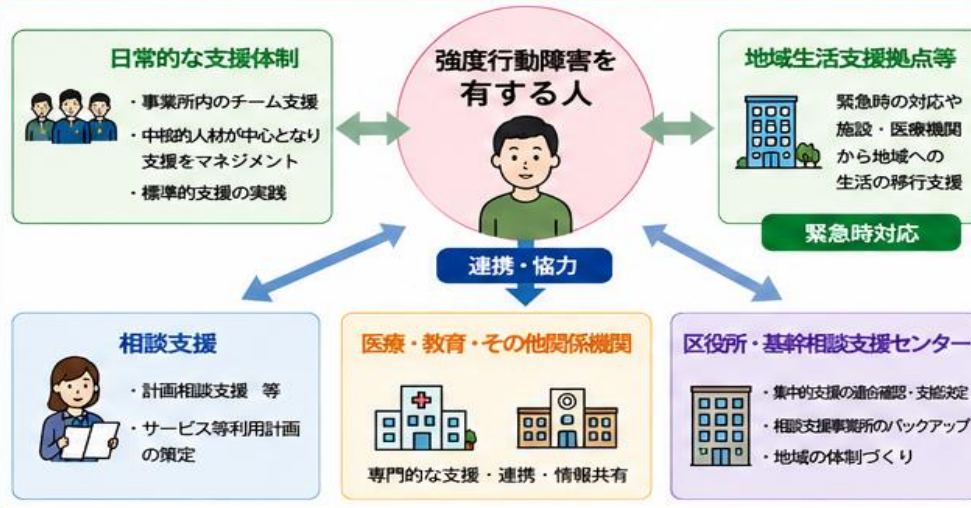
サービス等利用計画の作成、
集中的支援前後のケースワーク。



区役所・基幹相談支援センター

医療・教育・その他関係機関等
連携・調整・体制づくりを行う。

地域で支えるチーム体制（イメージ）



集中的支援の流れ（例）

① 必要性の検討



地域の支援チームで
状態悪化の状況を共有し、
集中的支援の必要性を
検討する。

② アセスメント・計画



広域的支援人材が
アセスメントを行い、
集中的支援計画を
作成する。

③ 集中的支援の実施（原則3～6カ月）



環境調整・支援方法の
工夫を集中的に実施し、
行動の安定と生活の
改善を図る。

④ 評価・引き継ぎ



支援の効果を評価し、
有効な支援方法を
地域の関係者へ
引き継ぐ。

⑤ 地域での継続支援



引き継いだ支援を
地域で継続し、
安定した暮らしの
維持を目指す。

★ 集中的支援で大切なこと

- × 行動だけを止める
- 「なぜ起きているか」を理解する

- × 本人を変える
- 環境を調整する

- × 個人対応
- チーム支援

本人が安心して 分かりやすく・楽に・安定して
生活できる環境を整え、地域で暮らし続けられることを目指します。

事業所の概要

事業所について

社会福祉法人恵和が運営する恵和青年寮は、障害者総合支援法に基づく障害者支援施設（施設入所・生活介護・短期入所・日中一時）として、主に知的障害のある方を対象に支援を行っている。

- ・ **事業種別** ： 障害者支援施設（施設入所支援）
- ・ **定 員** ： 80名（男性50名、女性30名）
- ・ **所 在 地** ： 神奈川県横浜市保土ヶ谷区今井町691
- ・ **障害支援区分** ： 5.9
- ・ **重度加算対象者** ： 65名

恵和青年寮（外観）



横浜市保土ヶ谷区にあります、知的障害のある方を対象とした定員80名の入所施設です。

支援チームの概要

チーム構成

- **サービス管理責任者**
 - ・ 支援計画全体の統括・フェイズ管理（アセスメント～PDCA）
 - ・ 支援手順書・会議運営。
- **生活支援員（現場支援者）**
 - ・ 日中活動・自立課題の実践・行動記録・
 - ・ 前兆行動の観察・環境調整の具体的実行。



※外部機関：横浜市発達障害者支援センター

チームの特色

- 1 安全確保と日常支援を安定して担ってきた実践力のあるチーム**
 - ・ 重度知的障害・行動障害のある利用者に対し、日々の生活支援・安全確保を継続して担ってきたチームであった。飛び出し行動や他害リスクがある中でも、その場での判断・即時対応により、大きな事故を防いできた。
- 2 本人理解への関心と「何とかしたい」という問題意識は共有されていた**
 - ・ 行動が頻発していること自体は、チーム全体の共通認識となっており、「なぜ起きるのか」「どうすれば落ち着くのか」を探索する姿勢はあった。
 - ・ 視覚的理解の強さ、ルーティンへの休存、切り替えの難しさなど、特性理解の断片的な知識は既に現場に存在していた。それらを時間帯・場面・環境条件と結びつけて整理する仕組みは未整備で、記録が「共有」や「検証」まで十分に活かされていなかった。
- 3 構造化支援の意識はあったが、全体設計までは至っていなかった**
 - ・ スケジュール提示や活動設定など、構造化を意識した支援は部分的に行われていた。
 - ・ しかし、休憩の意味づけ・活動と活動の切り替え・外が常に視界に入る動線といった環境全体の構造化については十分に整理されておらず、結果として行動が起こりやすい条件が残存していた。
- 4 属人的対応が中心で、「チームの型」は発展途上だった**
 - ・ 経験豊富な職員ほど、個人の工夫や感覚に基づいた対応を行っており、それ自体が支援を支えてきた側面がある。
 - ・ その一方で、支援手順や判断基準が明文化・共有されておらず、誰が関わっても同じ支援が再現される状態には至っていない。

事例報告

(中核的人材養成研修モデルケース)



30代男性。診断「最重度知的障害」「自閉スペクトラム症」。
知的水準はMA2歳5か月、IQ14。障害支援区分6。



■ 生活状況特別支援学校卒業後より生活介護事業所を利用する。

せんべい製造作業に従事していたが、工程変更や周囲刺激で混乱が見られた。
体調面・環境要因により通所困難な状況が続き、完全在宅となる。



■ 主な課題行動

他者への頭突き・顎突きトイレ以外での排便（浴室洗面器等）
頻度：ほぼ毎日
強度：他者・本人双方に外傷が残るレベル
特に「食事」「入浴」場面で生じやすい。



■ これまでの支援

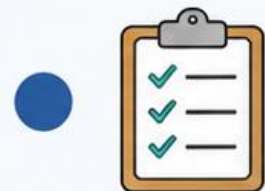
情緒的受容や言葉かけ中心の支援を継続。
一時的な安定はみられたが、行動頻度・強度の改善には至らなかった。



ポイント

- ・ 工程変更や周囲刺激が混乱の要因となり、在宅支援へ移行した事例。
- ・ 主な課題行動は頭突き・顎突き、トイレ以外での排便。
- ・ 情緒的受容や言葉かけのみでは十分な改善が見られず、行動の背景に基づく支援が必要であった。

機能的アセスメントに基づく支援と地域移行



飛び出し行動支援の
実践報告



短期入所+生活介護から
地域移行まで



機能的アセスメントに
基づく支援

日中活動時間帯（10:00～15:00）において、活動室内での活動中、職員による制止や声かけに応じず、活動室を離れて屋外へ出ていく行動が見られる。行動は敷地内にとどまらず、敷地外へ至る場合も含まれる。



課題となる行動

日中活動中に外へ飛び出す



自閉症の視点と周囲の環境や状況から考えられる課題となる行動の理由

【自閉症の視点】

- ・言葉そのものの理解が困難
- ・目に見えない暗黙のルール、言外の意味の理解が困難
- ・抽象的な言葉の意味理解が苦手
- ・知識や刺激を意味ある情報にまとめて捉えることが困難
- ・複数の指示を処理できない
- ・順序立てて活動することが困難
- ・注意の焦点が強く狭い
- ・注意の維持や持続が困難
- ・刺激への敏感さや鈍感さ
- ・刺激の取捨選択（自動調整）が難しい
- ・他者の心や感情を推し量ることが困難
- ・自身の感情に気づくことが難しい



【環境・状況】

- ・アクティビティシステムを導入している。
- ・次の行動の指示は入れているが、何工程先までの予定の提示はしていない。
- ・本人が選択する場面（方法や手段）はない。
- ・余暇グッズは、タブレットのみ。



期待される行動

活動の場に留まり、外へ飛び出さずに過ごす。



期待される行動に関する、視覚的サポート、教育の方略、必要なスキル

視覚的サポート



- ・言葉での説明だけでは活動のイメージを持ちにくいいため、やることを具体的に見える形で提示する（実物・写真・絵カードなど）。
- ・1つずつの課題を順番に配置（左から右、上から下など）し、「これを終えたら次」という流れを視覚的に理解できるようにする。

教育の方略



- ・「やることが分からない」「何も提示されていない」状態では行動が止まりやすいため、支援者が** 明確な課題提示（やることを見せる）**を行う。
- ・見通しがあることで安心して活動できるよう、活動の始まりと終わりを一貫して示す。

必要なスキル



- ・視覚的の手がかり理解力：提示された物や絵から、何をすべきかを理解する力。
- ・注目・集中スキル：提示された課題に意識を向け、取り組みを維持する力。
- ・スケジュール理解力：活動の順序や流れを把握し、見通しをもって行動する力。

支援手順書（実際に使用したもの）



- 支援手順書については、机上の計画として一括で作成するのではなく、**実際の支援場面ごと**（例：移動、作業開始、休憩、切り替え等）に分けて作成している。



- 各手順書は、現場で実際に使用している内容をもとに整理しており、支援者が**同じ対応を再現できること**を重視している。



ポイント

- ✓ 支援の質を安定させ、誰が対応しても同じ支援ができる。
- ✓ 環境や本人の状況に合わせて、手順を見直し・更新する。

【自立課題】



支援手順書 兼 記録用紙（アセスメントシート）

利用者名		サービス提供日	令和 年 月 日	作成者名	早坂
事業所名	恵和青年寮	サービス名	短期入所	提供者名	

時間	活動	サービス手順	記録
	準備	・シンボル準備（課題シンボル、休憩シンボル） ・課題を机に置く（2段（上：活動種、下：次のシンボル））	
	活動	① タイマーが鳴ったら停止 ② 課題シンボルを持ち課題机へ ③ 課題後はFBへ ④ 休憩シンボルを手に〇〇エリアへ	

※〇〇エリア

➡休憩、食事、トイレなど行動の前は必ず自立課題を挟む事とする。

写真

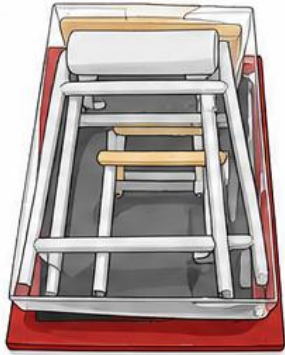


<記載点等>

- ①課題種はカゴの左端に緑テープが貼られている面を手前に配置する
- ②課題後の予定が「お茶」「食事」の場合には、1分程度の課題を配置する（配膳時間を確保できる課題種をセレクト）

視覚的な手掛かり（シンボル）

活動や行動の始まり・切り替え・休憩などを視覚的に示すシンボルです。
見てすぐに理解できるように、具体的な物や道具をシンボルとして使用します。



作業

意味

作業をする時間

使用場面

作業の開始時に提示します。

例

- ・机上の作業
- ・手作業
- ・課題取り組み など



休憩

意味

休憩をとる時間

使用場面

休憩に入るときに提示します。

例

- ・休憩スペースでの休息
- ・気持ちのリセット
- ・短時間の休憩 など



服薬

意味

服薬の時間

使用場面

服薬の時間に提示します。

例

- ・薬を飲む
- ・服薬の確認
- ・薬の自己管理の促し など



玄関

意味

玄関に行く時間
(外出の準備)

使用場面

外出準備や靴を履くときに提示します。

例

- ・靴を履く
- ・外出の準備
- ・玄関へ移動 など

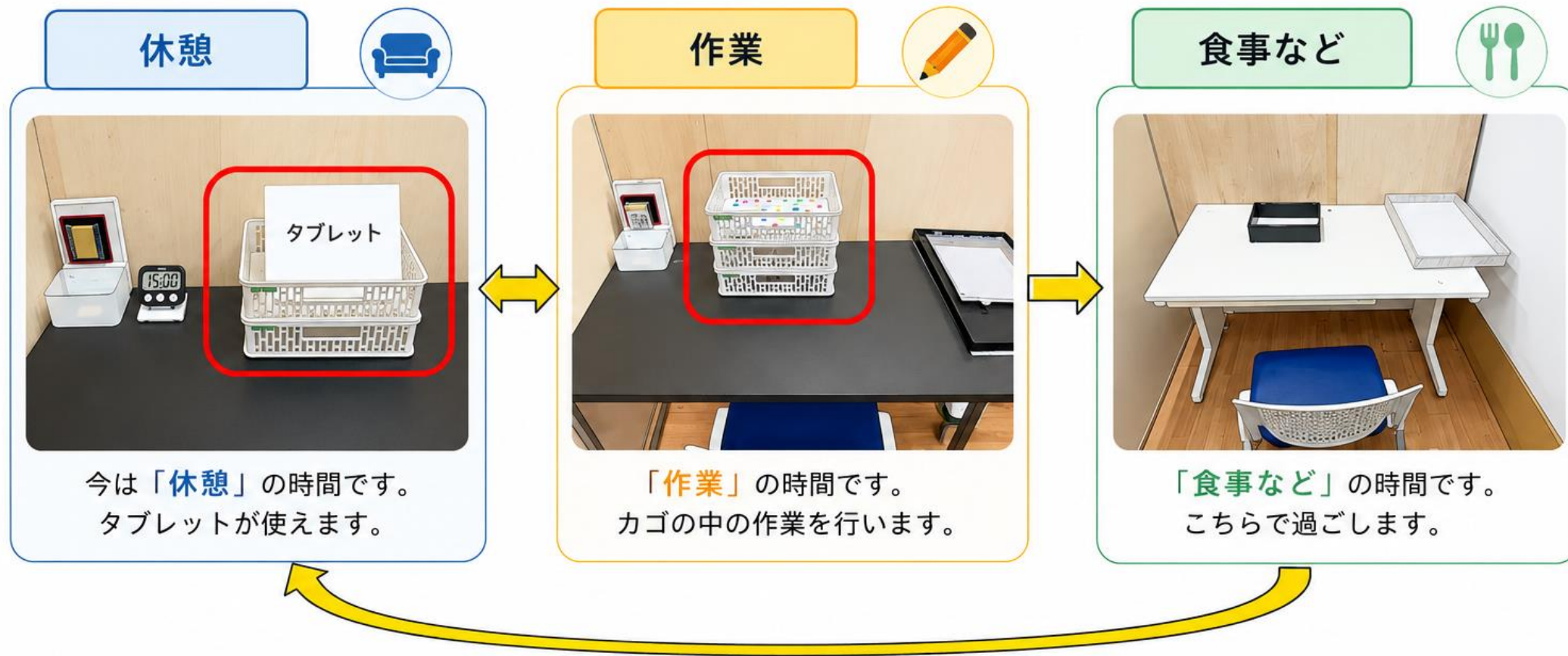


シンボルのポイント

- ・シンプルで分かりやすく、見てすぐに意味が伝わるのが大切です。
- ・実物や写真を使うことで、理解しやすくなります。
- ・活動の流れに合わせて、適切なタイミングで提示しましょう。

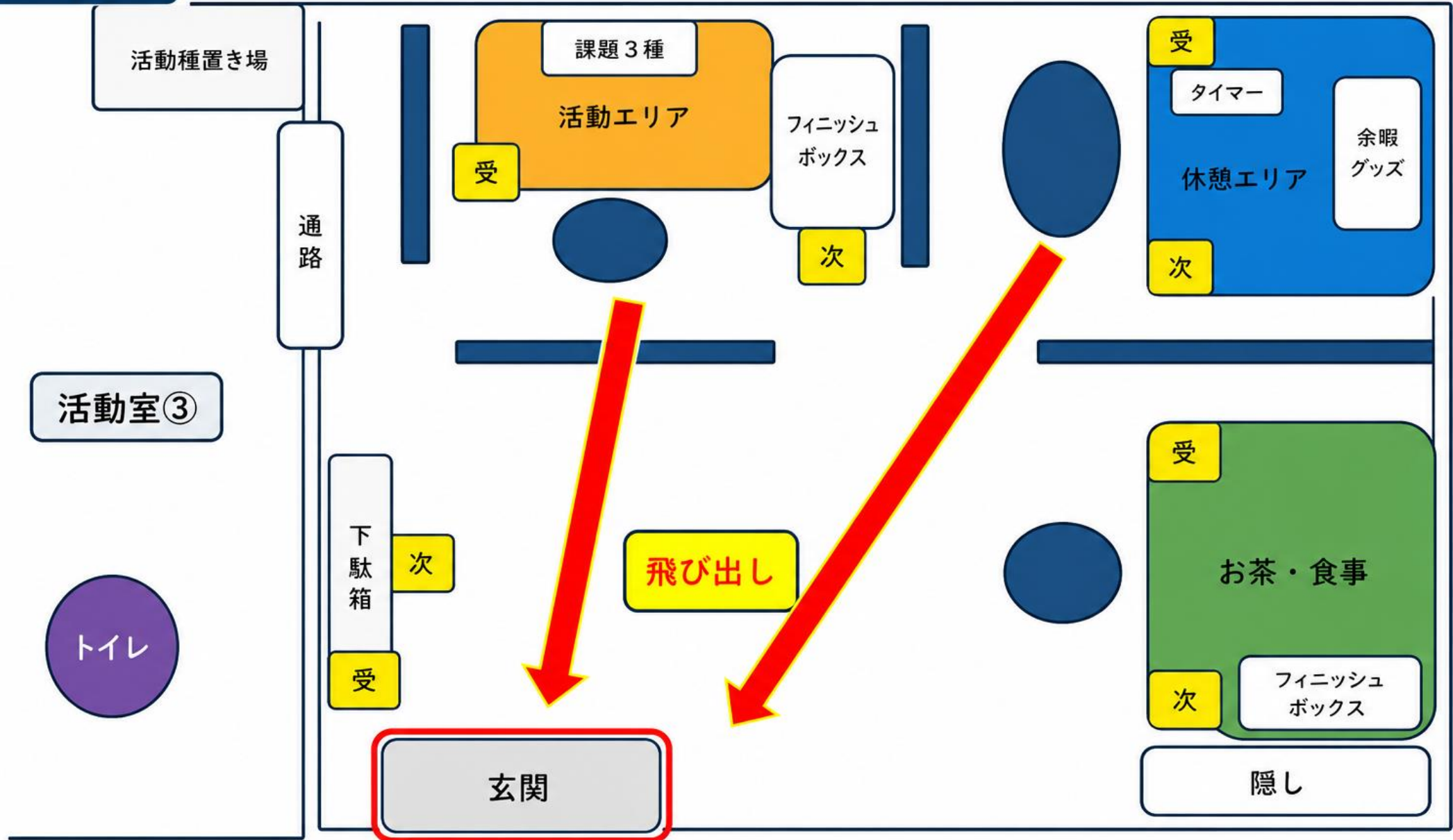
アクティビティシステムの流れ（導入初期）

活動の流れを視覚的に示し、次に何をするのかを分かりやすくします。



- 上段には **作業種を示すシンボル** を配置する。
- 最下段には **次の行動を示すシンボル** を配置する。
- このシンボルは、現在の作業が終了した後に起こる行動（次の作業、強化子など）を示し、活動終了後の見通しを伝える。

全体図



スキャッタープロットの活用



【時間】 10:00～15:00



黄色印

→ 外に出た回数

30分毎の記録（記入例）

	10:00～ 10:30	10:30～ 11:00	11:00～ 11:30	11:30～ 12:00	12:00～ 12:30	12:30～ 13:00	13:00～ 13:30	13:30～ 14:00	14:00～ 14:30	14:30～ 15:00
10:00	○					通所 ×				
11:00		○	○	○○	○○	通所 ×		○		
12:00				○		通所 ×				
13:00	○				○○	通所 ×	○	○	○	○
14:00		○	○○		○	通所 ×		○	○	○
15:00				○		通所 ×		○	○	○

例) ○ : 1回外に出た ○○ : 2回外に出た × : 通所日



スキャッタープロットの活用手順

- 1 まずは「時間軸を細かく取る」
(例: 10分単位で記録する)



- 2 次に「時間軸・要因を絞る」
(例: 休憩直前、他者の動きなど)



- 3 記録を見て、活動のパターンをつかむ
(例: いつ・どんな時に外に出やすいかを確認する)



10分毎の記録（記入例）

時刻	10時						通所	11時				
	～10分	～20分	～30分	～40分	～40分	～50分		～10分	～20分	～30分	～40分	～50分
10:00			○				×					
10:10	○			○			通所		○			
10:20		○			○		通所			○		
10:30					○	○	通所					
10:40				○			×		○			
10:50			○				×	○				
11:00		○			○		通所		○			
11:20							通所			○		
11:30	○						通所					
11:40							通所		○			
11:50		○		○			通所			○	○	
12:00			○				通所				○	
12:10						○	×					
12:20					○		×					

時刻	12時						通所	13時				
	～10分	～20分	～30分	～40分	～40分	～50分		～10分	～20分	～30分	～40分	～50分
12:30	○		○				×					
12:40							×	○				
12:50				○			通所			○		
13:00		○					通所					
13:10						○	通所					
13:20	○						通所		○			
13:30				○			×				○	
13:40			○				×					
13:50	○				○		通所	○				
14:00							通所					
14:10						○	通所					
14:20				○			×			○		
14:30	○						通所					○
14:40		○					通所				○	
14:50							通所					○
15:00							×		○			



この記録をもとに、次の作業や強化子の工夫などにつなげていきます。

フェーズ② 支援再構築期

環境調整・再構造化支援

1 「休憩」の廃止と新システムへの移行

休憩席を撤廃し、「作業席①」「作業席②」として再設定
両作業席から場面シンボルの発信が可能な構造に変更

「休憩シンボル」は廃止し、
「作業②（ハート）」シンボルへ置き換え



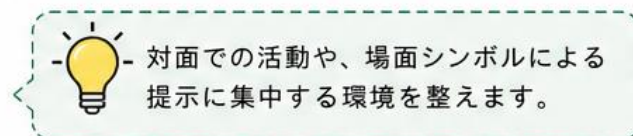
2 環境・物理構造の再編

席配置を横並びに変更



3 道具・手続きの見直し

-  タイマー使用を廃止
-  タブレット単独活動は中止
(拒否が出やすいため)



4 課題量・動機づけの調整

作業量を1段 → 2段へ増量
強化子（お菓子）を導入

お菓子シンボル：フリスク・活動継続の動機づけ



ポイント

- ・環境や物理構造を見直し、より分かりやすく、活動に集中しやすい場にします。
- ・道具や手続きを整理し、本人にとって取り組みやすい仕組みにします。
- ・課題量を段階的に増やし、適切な強化子で活動の継続を促します。

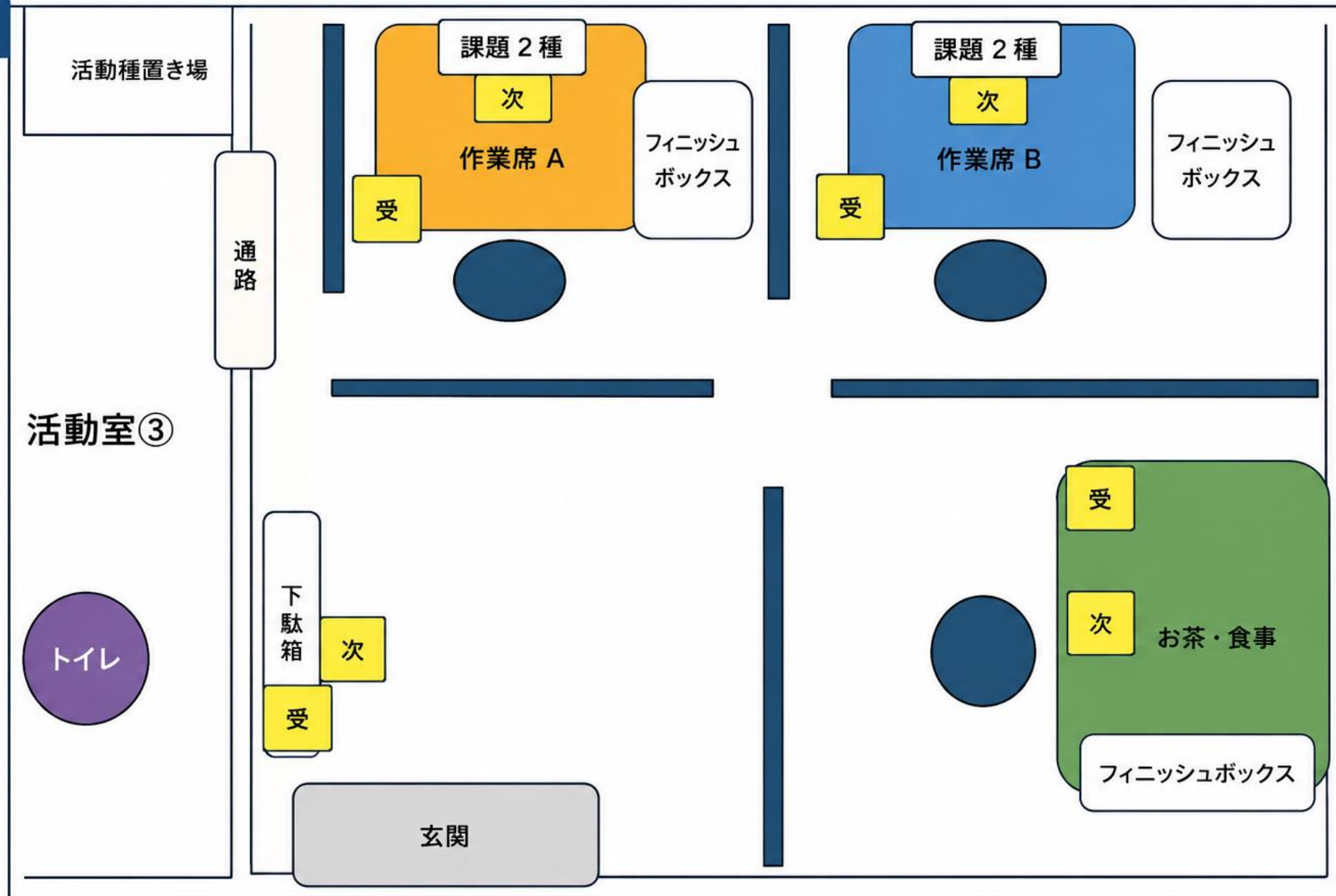
アクティビティシステムの流れ（変更後）



- ✓ 作業 A・作業 B から移動のシンボルが出ます。
- ✓ また食事席からも A・B に戻ることがランダムで表出します。

アクティビティシステムの流れ（変更後）

全体図



フェーズ② 支援効果

行動変化・安定化

- 飛び出し行動が減少



- 活動継続・着席が安定



- 切り替え混乱が軽減



- チーム支援が統一



好子アセスメント
本人の好きなもの・強みを活かす

B145411

さん 好み早わかりシート

記入日 2025 年 10 月 15 日

資料②

記入者

言われてうれしいことば

- ・ ありがとう
- ・ よくやったね
- ・ よくできたね

好きな遊び

- ・ しゃぼん玉
- ・ 外出先での写真を見る
- ・ スーパーファミコン
- ・ 自転車に乗る
- ・ シールを剥がす
- ・ YouTubeを見る

好きな人

- ・ お父さん
- ・ お母さん
- ・ お兄さん
- ・ 特別支援学校の先生

好きなTV番組

- ・ ちびまる子ちゃん
- ・ サザエさん

好きな場所・出かけやすい場所

- ・ 八景島シーパラダイスのタワー
- ・ バーミヤン
- ・ 自宅のベランダ

好きなキャラクター

- ・ ガチャピン
- ・ スーパーマリオ

好きなお菓子・デザート

- ・ ソーダ味のグミ
- ・ プリン
- ・ フリスク(タブレット)

好きなごはん(おかず)

- ・ 寿司・肉うどん・刺身・ラーメン
- ・ 天ぷら・煮魚・うなぎ・餃子
- ・ 炊き込みごはん・ステーキ

最近買いたい(欲しい)と思っているもの

- ・ 春雨スープ

観察された変化・効果



- 外への飛び出し行動が減少
- 場面移行時の混乱・停滞が軽減
- 「休憩＝帰れる／外に出られる」という誤学習の再活性化が抑制
- 活動への着席・継続が安定



- 「休憩」が機能していなかった可能性
- 「休憩＝活動からの離脱・外への移動」という行動連鎖を強化していたと考えられる



- 作業①・②化による効果
- すべての場면을「活動」として再構成
- 逃避・回避の選択肢が構造上消失



- 強化子導入の意味
- 活動継続の理由が明確・即時的に提示された。
- 「終わったらメリットが得られる」構造が見えやすくなり、予測可能性と納得感が向上。

	10/31 (金)	11/3 (月)	11/4 (火)	11/5 (水)	11/6 (木)	11/7 (金)	11/10 (月)	11/11 (火)	11/12 (水)	11/13 (木)	11/14 (金)	11/17 (月)	11/18 (火)	11/19 (水)
8:00														
9:00														
10:00														
11:00														
12:00														
13:00														
14:00														
15:00														
16:00														
17:00														
18:00														
19:00														



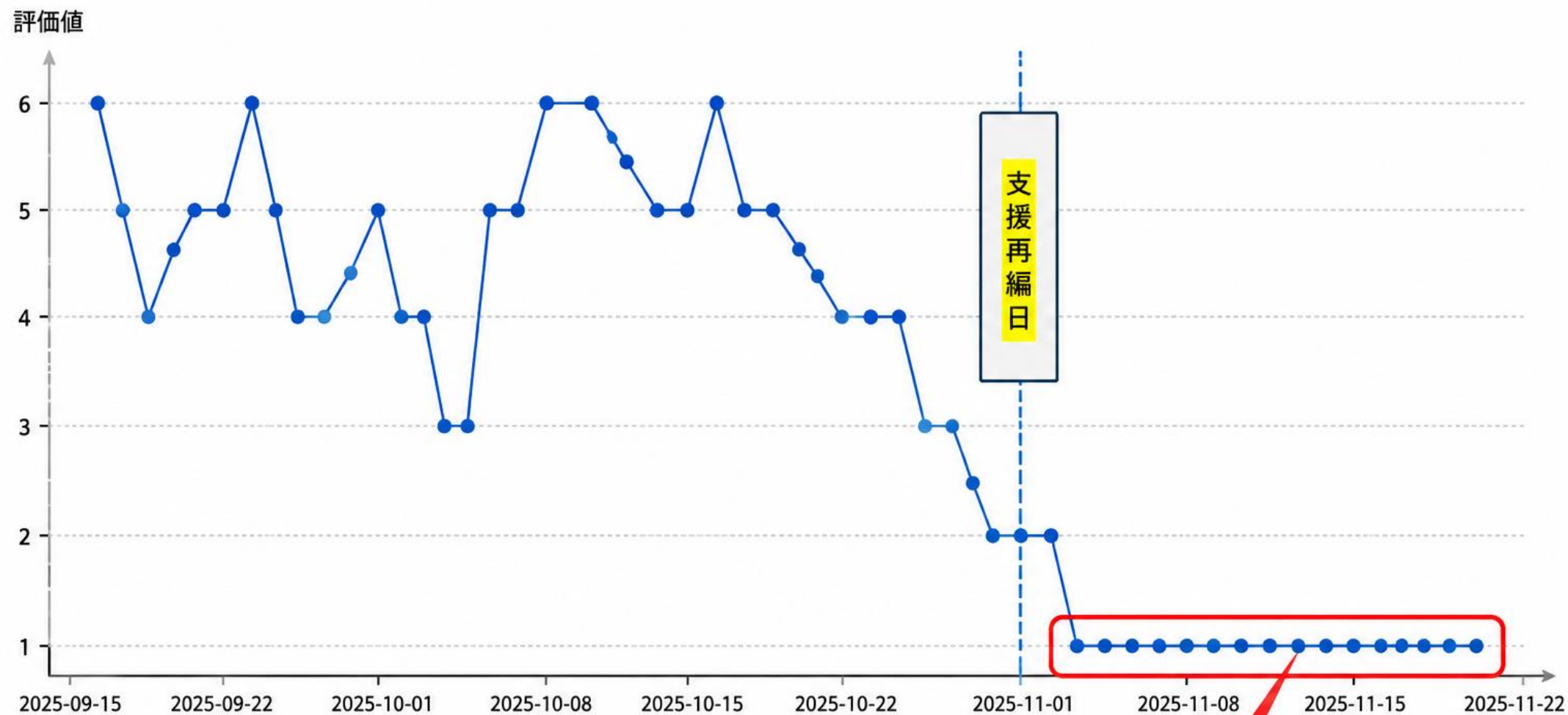
休憩・休息



作業・活動



強化子（ごほうび）



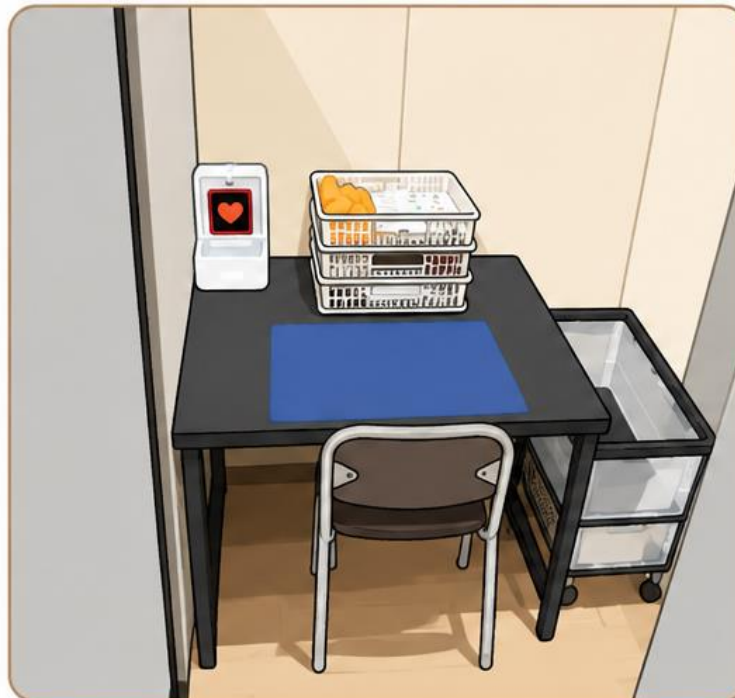
地域移行期

单身生活を開始し、外部の生活介護事業所へ移行する。
恵和青年寮において取り組んできた支援環境および支援内容を基盤として、
新たな生活環境での生活がスタートする。

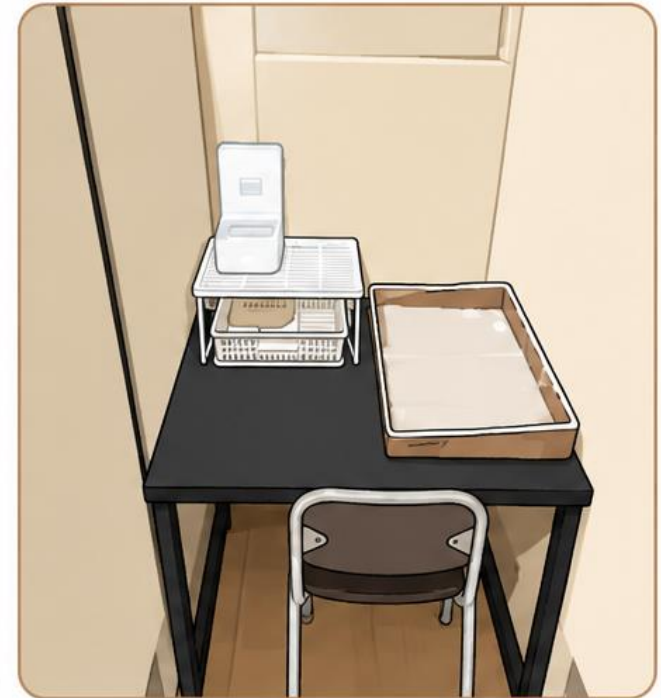
作業A



作業B



食事など



新たに通所を開始する本人の支援環境

● 单身生活＋生活介護へ移行

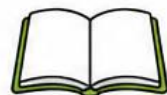
次の活動先へ、何をどう継承するのか

【3層構造】

① 構造（環境・配置・流れ）



② 手順（迷ったときに立ち戻れる根拠）



③ 判断（困った時の考え方）



継承①【構造】

誰がやっても同じ支援ができるように、環境を整える

抽象



具体



× 「落ち着く関わり方」 → ○ 「落ち着く行動が起きる環境の構造」

【具体例】



休憩前提ではなく、
活動A／活動Bを
往復する構造。



タイマーに頼らず、
物量・シンボルで
始まりと終わりを示す。



行動が出たら制止ではなく、
次のシンボルを提示する。

継承②【支援】— 手順書は「迷ったときに立ち戻れる根拠」—

具体的な移行先に渡しているもの



場面ごとの支援手順書
(例：作業開始／切り替え／移動)



視覚的指示 (シンボル)



支援動画など



迷ったときに
この手順書に立ち戻れば
確認できますよ！

ポイント

安心して取り組めるよう、
支援の“拠り所”を
引き継ぎます。

継承③【判断 (思考プロセス)】— マニュアルに書けない点の共有 —

- 飛び出しが出たら、
「職員を増やす」ではなく、
構造が崩れていないかをまず疑う。



原因は？

- ☐ 環境は？
- ☐ スケジュールは？
- ☐ 支援の手順は？
- ☐ 物の配置は？

▶ 原因 (構造) を見直すことが大切！

- 拒否が出たら、無理にこちらのやり方を通すのではなく、
活動量・順序・見通しを再調整する。



その人に合った形に調整することが支援につながる！



「なぜそう考えるのか」「どんな手順で判断するのか」を言語化し、次の担当者に伝え続けましょう！

強度行動障害を有する人への支援体制（イメージ）

本人の特性と環境との相互作用（ミスマッチ）に着目し、地域全体で切れ目のない支援を行う



支援の基本的
を考え方



アセスメント
本人の特性と
環境を分析する



支援計画の作成
課題と支援の方向性を
明確にする



支援の実施
チームで一貫した
支援を行う



評価・見直し
定期的に評価し、
支援を見直す



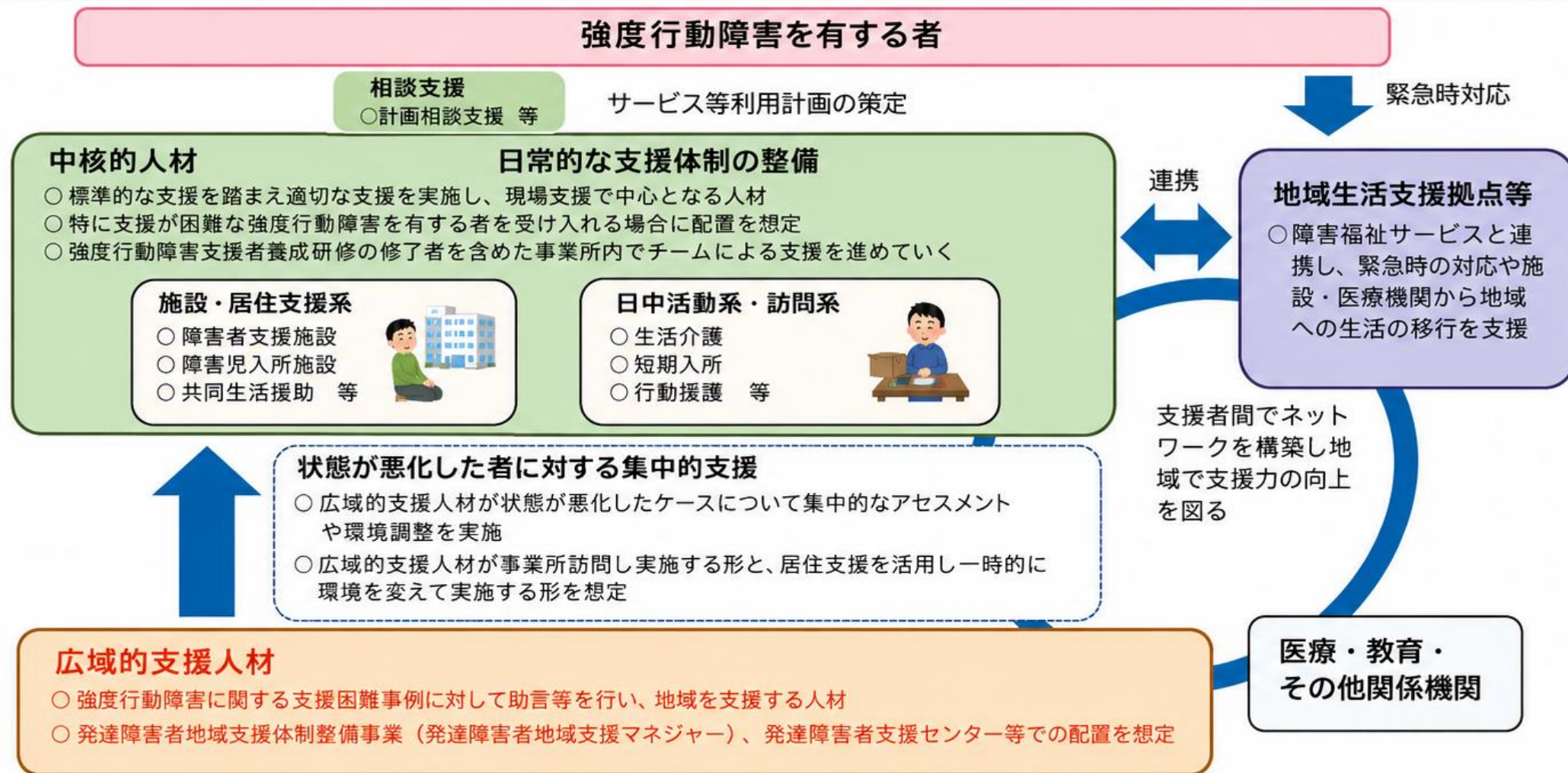
質の向上・継続
より良い支援を
目指し続ける

強度行動障害を有する者の地域の支援体制イメージ

【出典】情報アップデートDay2025
厚生労働省 社会・援護局
障害保健福祉部 障害福祉課
地域生活・発達障害者支援室

参考

- 強度行動障害を有する者の支援においては、特定の事業所、特定の支援者だけで支えるには限界があり、地域の中で複数の事業所、関係機関が連携して支援を行う体制を構築していくことが必要である。
- 事業所においては適切な支援の実施をマネジメントする中核的人材を中心にチームによる支援を進めていくことが必要である。
また、各地域において、広域的支援人材等が事業所への指導助言等を行い、事業所の支援力の向上や集中的支援による困難事案への対応を行う体制を整備していくことが必要である。



≡ 広域的人材と中核的人材の役割 ≡

広域的人材（支援チームへのコンサルテーション）

- 強度行動障害のある人への支援困難ケースに対して、アセスメントや環境調整、支援方法の整理を行いながら、現場支援者へ助言を行う地域の専門人材。
本人だけでなく、事業所や支援チーム全体を支え、地域で継続して支援できる体制づくりを担う。

支援困難ケース



困っている…
どう支援したら
いいだろう…

広域的人材



- アセスメント
- 環境調整の提案
- 支援方法の整理
- 助言・コンサルテーション

現場支援者・支援チーム



- 支援の質向上
- チームの安定
- 地域で継続的に支援できる体制づくり

中核的人材（支援チームの司令塔）

- 専門的な研修を修了したリーダーを配置して、主に施設の職員に対するOJTを実施。
当事業所については、集中的支援後のフォローアップ、地域移行、地域定着を時限的に行う。

OJTの実施



施設職員に
OJTを行い、
支援力を向上

フォローアップ



集中的支援後の
フォローアップを
実施

地域移行



地域の事業所や
サービスへ
スムーズに移行

地域定着



地域で安心して
暮らし続けられるよう
支援を時限的に実施



広域的人材と中核的人材が連携し、本人・事業所・支援チームを支え、地域で安心して暮らせる体制づくりをめざします。

2 その行動は「困っています」の訴え

「強度行動障害」とは？

その人の**状態像**のことを指します。

- 「激しい行態」は、言葉では伝えられない人が一生懸命相手に伝えようと発している「**SOSのサイン**」であると捉えられます。



「言葉の通じない国」の例え話

- 困っているのに助けを呼べないとき、人は誰でもパニックになることを伝え、自分事として共感を得られる



- 「わからない」「伝わらない」が続いてしまうと**どうなるか**。



3

行動障害がある方の「特性配慮」

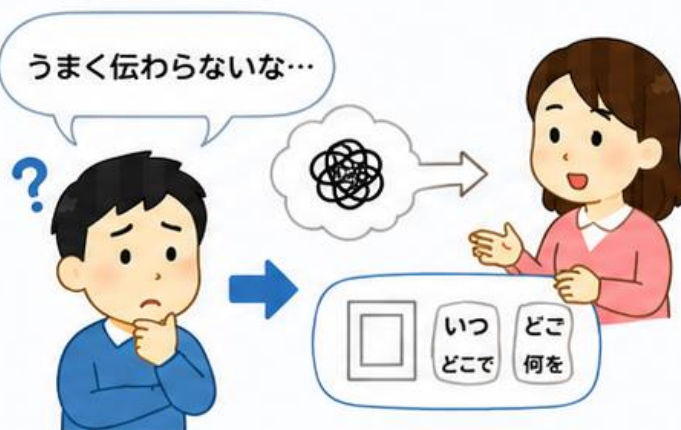


障害特性の三つ組みとは

① 社会性の特性

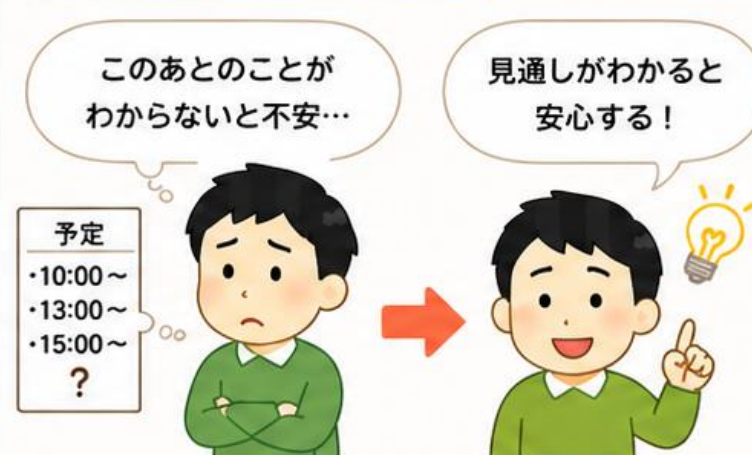


② コミュニケーションの特性



言葉のやりとりや、気持ち・意図の伝え合いが苦手なことがあります

③ 想像力の特性



先の見通しを立てたり、状況を予測することが苦手なことがあります

※ 感覚の特性

音・光・触感・においなど、感覚の刺激に対して過敏だったり、鈍感だったりすることがあります。



≡ 特性の理解と5つの工夫 ≡

① 社会性の特性



② コミュニケーションの特性



③ 想像力の特性



④ 感覚の特性



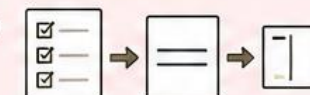
● 時間の工夫（生活の見通し）



● 場所の工夫（活動場所、休憩する場所、刺激の整理）



● 方法の工夫（やり方・終わり・次の工程）



● 見え方の工夫（ヒント・着目）

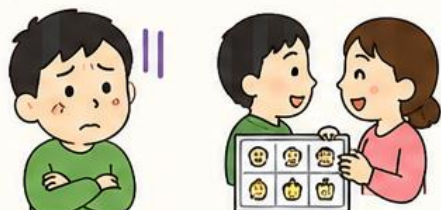


● やりとりの工夫（コミュニケーションツール）

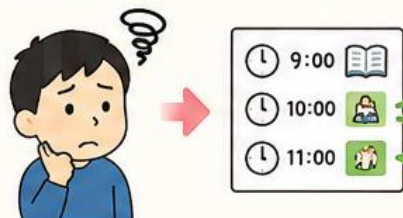


マッチしたもの

人との関わりが苦手



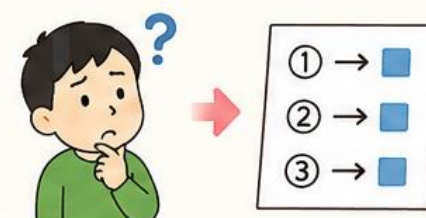
予定の切り替えが苦手



感覚に敏感



やり方がわかりにくい



社会性の特徴



どうしたら
良いのか分からない不安

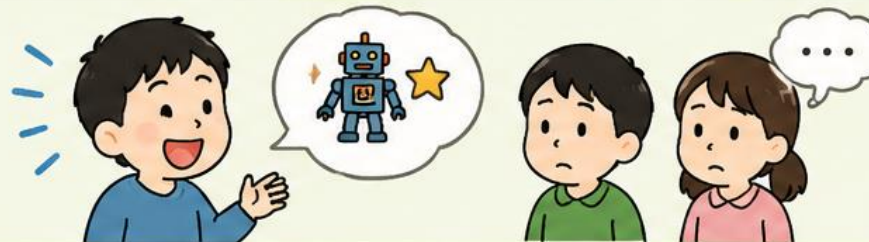
- 電車の中で、
大きな声で話してしまう。



- 暗黙のルールが分からない。
(列に並ぶ、冠婚葬祭のマナー)



- 自己中心的に見える。



- 一人のペースで歩き、
他者を待ってくれない。



コミュニケーションの特性 (伝わらない・理解できない不安)



1 人と、コミュニケーションをとることが苦手



- ・人と話すのが緊張する
- ・何を話していいかわからない

2 コミュニケーションの方法が独特 (相手の手を持って要求)



- ・自分の伝え方が独特
- ・相手の手を引いたり、持って要求することがある

3 不安な時の表現方法 (行動が止まってしまう、声出し、失禁など)



4 自分の必要な話が終わると、こちらの話には興味がない



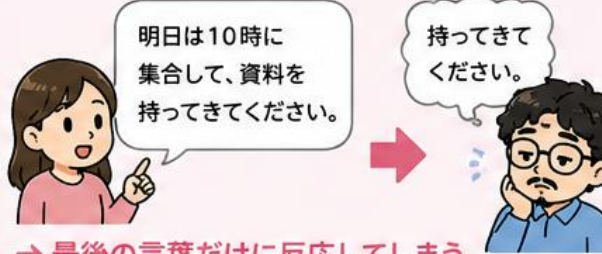
5 長い文章を理解することが難しい



今日は午後から会議があって、そのあと資料をまとめて、夕方までに提出してもらえたら助かります。

→ 内容が理解できない...

6 言葉の最後だけを聞き取ってしまう



→ 最後の言葉だけに反応してしまう

7 伝わらない・理解できない不安



不安が強くなると、混乱してしまうことも...

想像力の特徴（予測できない不安）



1 電車の乗り換えがわからない



見通しが立たず、不安になる

2 予定時間からの逆算ができない



時間の見積もりや計画が苦手

3 新しいことが苦手、急な変更が苦手



見通しが崩れると、混乱や不安が強くなる

4 相手の立場に立って、考えることが苦手



相手の気持ちや考えを想像するのが難しい

5 同じことを繰り返す（こだわり→囚われ）



安心したくて繰り返し、時間やエネルギーを消耗する

6 方向音痴・・・など



空間の把握や方向の判断が苦手



これらの特性は、努力不足やわがままではなく、脳の特性によるものです。理解されることで、不安が減り、自分らしく過ごしやすいになります。



≡ 感覚の特性（一人ひとり違う感じ方）

- 聴覚の過敏と鈍麻
- 視覚の過敏と鈍麻
- 触覚の過敏と鈍麻
- 味覚の過敏と鈍麻
- 嗅覚の過敏と鈍麻
- 前頭覚の特有な感覚

同じ刺激でも、
人によって感じ方が
違うことがあります。



聴覚の過敏と鈍麻



大きな音がつらい、
または気づきにくい。

視覚の過敏と鈍麻



強い光やまぶしさが
つらい、または気づきにくい。

触覚の過敏と鈍麻



服のタグや素材が気になる、
または痛みに気づきにくい。

味覚の過敏と鈍麻



特定の味やにおいが
苦手、または気づきにくい。

嗅覚の過敏と鈍麻



においが強く感じる、
または気づきにくい。

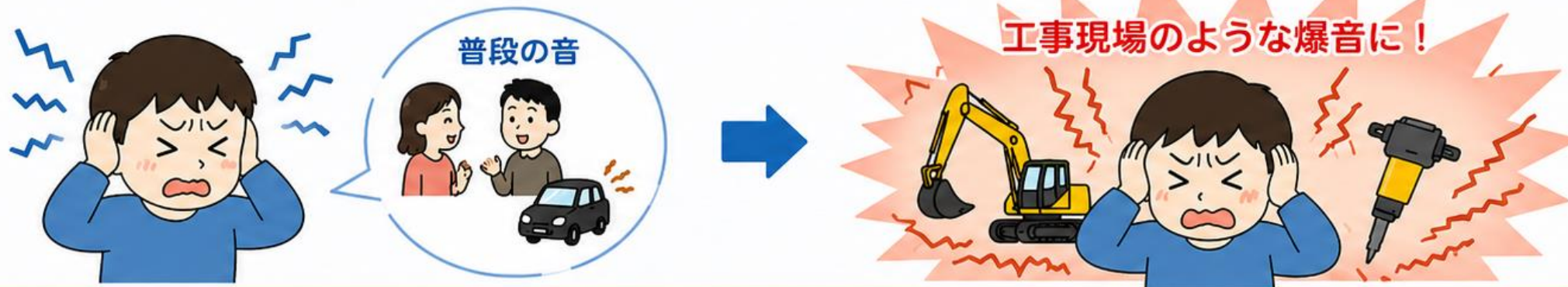
前頭覚の特有な感覚



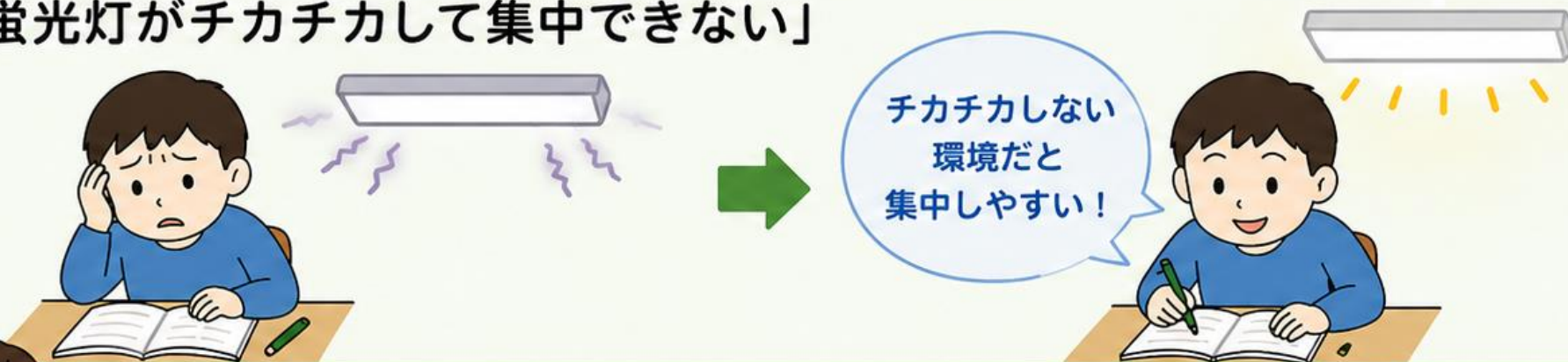
3：行動障害がある方の「特性配慮」

五感の過敏さ

- 「普通の音が、工事現場のような爆音に聞こえる」

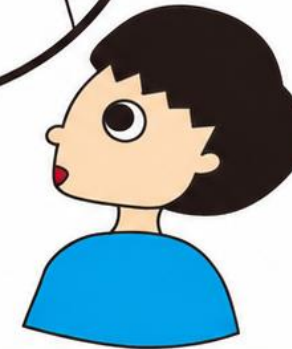
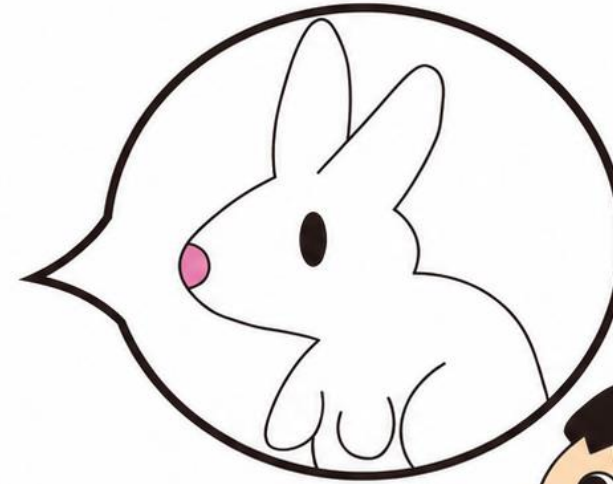
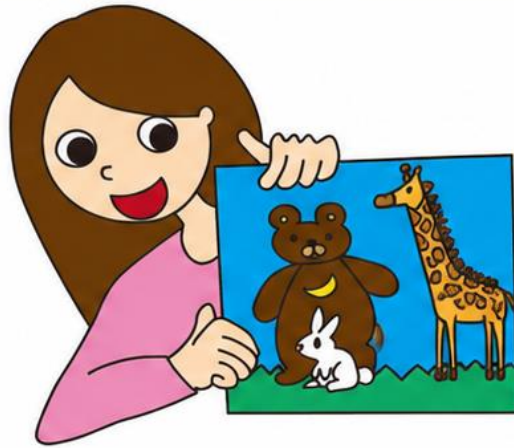


- 「蛍光灯がチカチカして集中できない」



彼らが見ている世界の特性を説明します。

発達障害・自閉スペクトラム症の方の見え方 一点集中



- 全体を見ることが難しい
- 一部しか視界に入っていない
(全く見えていないわけではなく
周りはぼやけて見える)

実際に近い見え方



発達障害・自閉スペクトラム症の方の見え方 転導的

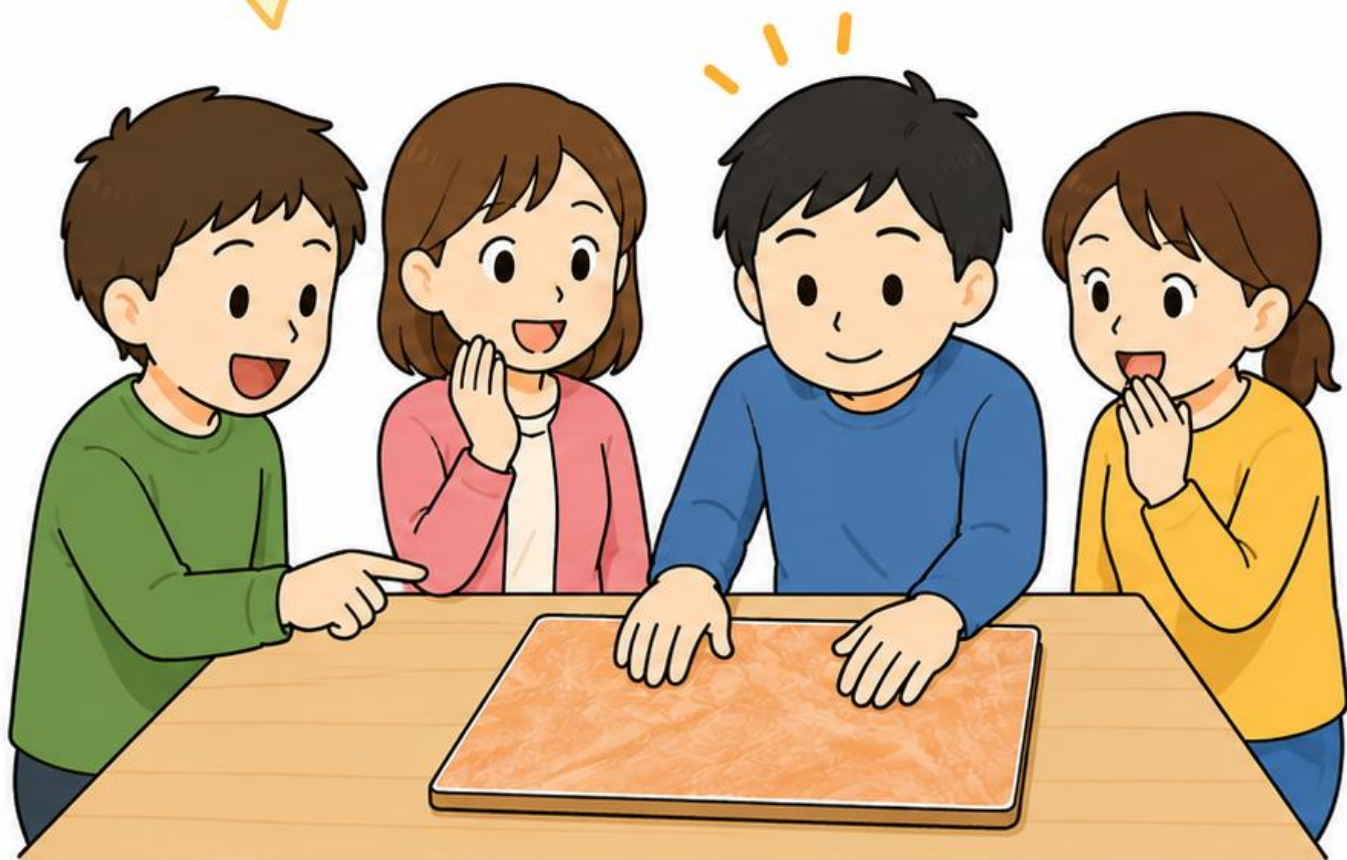


実際に近い見え方



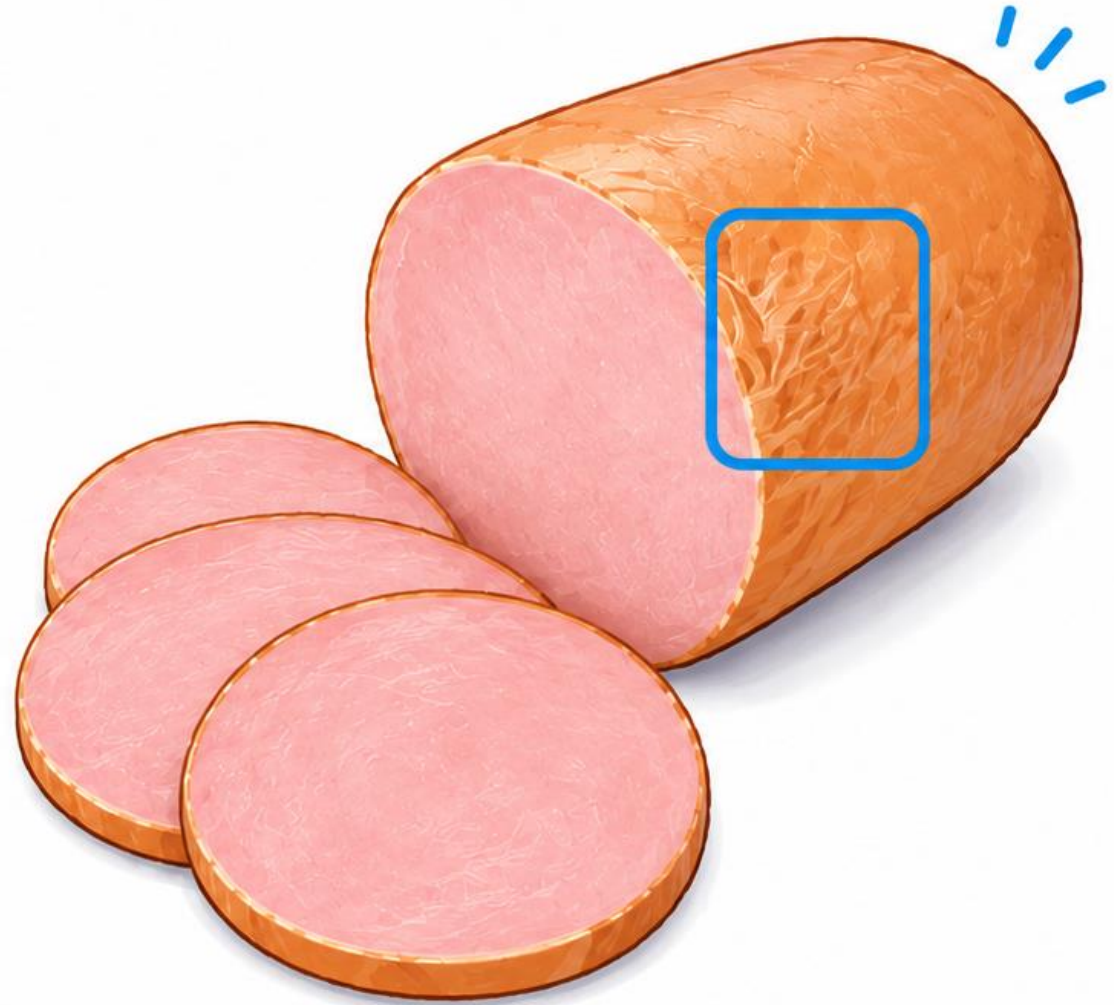
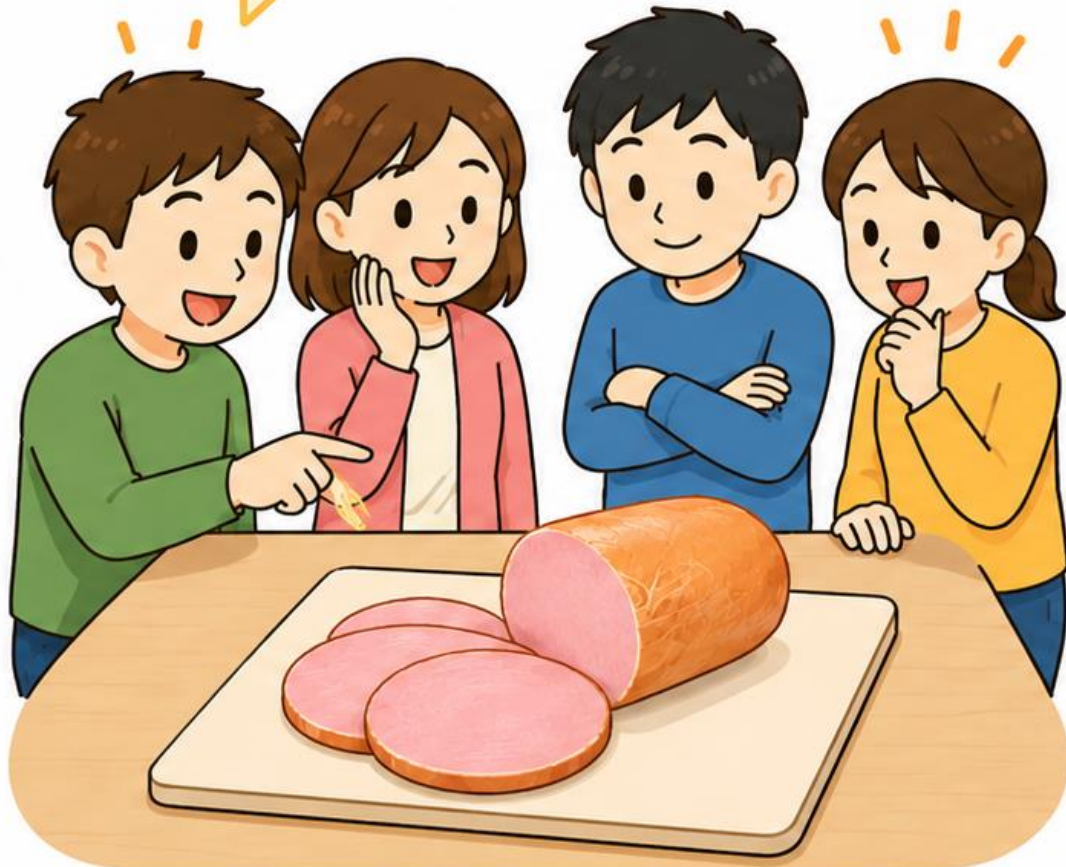
3：行動障害がある方の「特性配慮」

みなさん体験してみましょう！



3：行動障害がある方の「特性配慮」

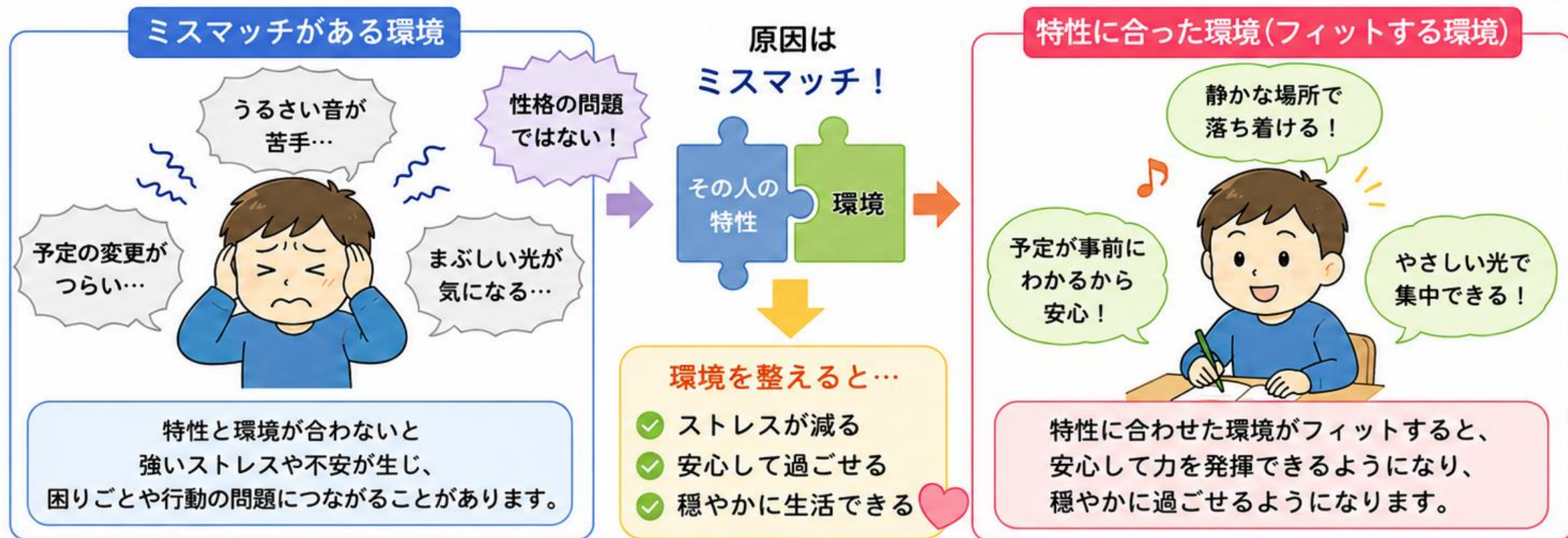
みなさん
体験してみましょう！



3：行動障害がある方の「特性配慮」

環境を整えば、穏やかになれる

- 「性格」ではなく、「環境」とのミスマッチが原因であることを強調して、特性に合わせた環境がフィットすることで変われることを伝えます。



「性格」を変えるのではなく、
「環境」を整えることが、その人らしさを活かす第一歩になります。

3：行動障害がある方の「特性配慮」

冰山モデル：

表面だけでは本質はわからない。

見えていること（行動）の裏には見えない想いや価値観がある



行動

表面に見える部分。

言葉や行動として表に出ている。



パターン

（思考・感情）

くせや思考の傾向、感情のパターン。

繰り返される反応の背景にあるもの。



価値観・ 信念・思い込み

大切にしている価値観や信じていること、
無意識の思い込み。



根っこ

（存在理由・願い・動機）

その人の根本にある想い、願い、
本当に大切にしている動機。

冰山モデル

表面に見える行動の裏には、
特性と環境の**ミスマッチ**がある。

ミスマッチ

うまくいかない
困った行動

その人の特性

生まれ持った特性や育ちの中で
形づくられた特性



感覚が敏感／鈍感
音・光・触り心地などに
敏感、または気づきにくい



見通しが持ちにくい
先のことや切り替えが
分かりにくい



こだわりが強い
いつも同じやり方や手順に
こだわる



コミュニケーションが苦手
気持ちを伝えたり、相手の
意図を理解するのが難しい



不安が強い・疲れやすい
変化や新しいことに不安を
感じやすく、疲れやすい

見える行動

(表面に出ている行動)

例) こだわりが強い
パニックになる
切り替えができない など

見えない理由・背景

(特性やその人の内面の理解)

- ・感覚の過敏さ／鈍麻さ
- ・不安が強い
- ・こだわりや見通しの必要性が高い
- ・コミュニケーションの苦手さ
- ・切り替えが苦手
- ・疲れやすい など



その人の特性・状態を理解することが、
支援の第一歩です。

環境・状況

周りの環境や関わり方、状況など
の影響



時間の流れが分かりにくい
予定が分からない、急な
変更が多い



感覚的に負担が大きい
騒がしい、まぶしい、
においがきつい など



指示や情報が分かりにくい
言葉だけの説明、抽象的な
表現が多い



対応が不安定・不一致
人によって支援が違う、
その時の気分で変わる など



物理的な環境が合っていない
ごちゃごちゃしている、
やることが見えない



ミスマッチを減らすことが支援のポイント！

特性に合った環境や関わり方を整えることで、
その人らしく安心して過ごし、力を発揮しやすくなります。



理解する
特性や背景を知る



調整する
環境や関わり方を整える



マッチする
安心して力を発揮できる

4: 地域みなさまにお願いしたいこと

『予防的支援の重要性』



早期の気づき・声かけ

変化に気づき、
支援につなげましょう



関係機関との連携

行政や支援機関と協力し、
切れ目のない支援を



行動障害のある方が、地域で安心して
暮らし続けられる未来のために



つながり・見守り

日頃のつながりが、
安心につながります



支え合える地域へ

一人ひとりができることから
始めていきましょう

予防的支援の重要性

集中的支援が「**火事（大パニック）**」を消し止める消防車だとしたら、
地域みなさんの日々の関わりは「**火事を未然に防ぐ防火活動（予防的支援）**」です。

集中的支援＝消防車（火事を消す）



すでに起きてしまった火事を、
すばやく消し止め、大きな被害を防ぐ。

予防的支援＝防火活動（火事を未然に防ぐ）



日々の関わりや見守りで、火事の原因となる
小さな火種を見つけ、火事を未然に防ぐ。



日々の「予防的支援」が、安心・安全な地域をつくれます！

予防的支援の重要性



日々の関わりが
安心と安全な地域を
つくります！

- 予防的支援とは、本人の特性（情報の入り方、処理の仕方）を常に分析して、それに合わせた配慮（構造化、視覚提示など）を「**継続**」すること



- 「**慣れてきたから大丈夫だろう**」という配慮の省略が混乱してしまうこともある



- 配慮があるから、**安心できる意思決定**、**QOLの向上**に繋がる



予防的支援の重要性

1



まずは本人理解
(障害特性の理解)



得意なこと・苦手なこと、感覚の特性、こだわりの有無、コミュニケーションの特徴など、その人らしさを理解することが出発点です。



2



アセスメント
記録の重要性



行動の背景やきっかけ、結果を記録し、パターンや傾向を分析することで、根拠に基づいた支援につながります。



3



統一された支援の提供



本人に関わるすべての人が、同じ方針・方法で一貫した支援を行うことで、安心感が生まれ、よりよい成長を支えることができます。

4

望ましい行動が起きた時、
本人を正すのではなく、
なぜエラーが起きたのかを
環境面から探る（環境調整）

望ましい行動が起きた



本人を正すのではなく…

なぜエラーが起きたのか？



- ・指示が分かりにくい？
- ・環境が落ち着かない？
- ・スケジュールが不明？
- ・感覚的に不快？

環境面から探る（環境調整）



- ・伝え方を工夫する
- ・環境を整理する
- ・見通しを持てるようにする
- ・刺激を調整する

エラーの減少・安心



安心して行動できる！



一人ひとりの特性に合わせた予防的支援が、本人の安心・成長・QOLの向上につながります！

記録の重要性



正しい状態像をつかむ

本人の現在の状態や変化を、正確に把握することができます。



チームで情報を共有する

記録をもとに、チーム全員が同じ情報を共有し、連携した支援ができます。



支援の効果を確認する

支援の結果や変化を振り返り、効果を確認することができます。

支援の基本



正しい状態像をつかむ



印象から客観的な事実へ



印象の限界:「大変な人」「大人しい人」といった主観的な印象だけでは、その人の具体的な状態を把握することはできない。



具体情報の収集:「いつ」「どこで」「どのような行動をとっているか」といった、客観的で具体的な情報が必要となる。

状態像を知るメリット



個別支援の実現:正しい状態像を知ることによって、初めてその人一人ひとりに合った適切な支援へと繋げることができる。



共通認識の形成:チーム全体で具体的な情報を共有することで、支援の方向性に一貫性を持たせることが可能になる。



印象ではなく「事実」を見つめ、正しい状態像をつかむことが、質の高い支援の第一歩につながります！



チームで情報を共有する

- 1 チームで支援したり、
対応を考えていく上で
情報共有は重要である



- 2 直接の関わりで
得られた情報を
チームで共有する



情報を共有することで、チーム全体でより良い支援ができる！

記録の書き方

① 「事実」と「意見」を切り分ける

事実

見たこと・聞いたこと



意見

考え・感じたこと



② 5W1Hを明確にする

When

いつ

Where

どこで

Who

だれが

What

なにを

Why

なぜ

How

どのように

③ 抽象的な表現ではなく、具体的な行動で書く

✕ 抽象的な表現



落ち着きがない
頑張っている
など

○ 具体的な行動



・席を立つ回数が多い
・声を出してしまう
・課題に最後まで
取り組んだ など

④ 読み手を意識した「型」で書く

事実

何があったか

背景・要因

なぜそうなったか

支援・対応

どう関わったか

結果・気づき

どうなったか
どう感じたか



正確でわかりやすい記録は、
支援の質を高め、チームの連携にもつながります！



情報共有のベース となる記録



具体的な例



何が？誰が？
状況が分かりにくい



〇〇さんの水遊びを
止めたら、頬を叩く自傷
があった。
支援員も対応に困った。



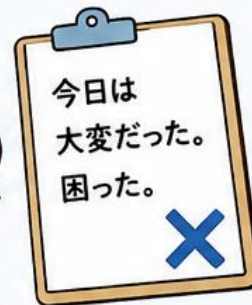
具体的に記述
具体的な状況が
共有できる

情報共有のベースとなる記録

✓ 好ましくない記録の書き方

- 主観的・感情的である：
支援者の印象や感想（「大変だった」
「困った」など）が中心で、
客観的な事実が不足している。

「大変だった…」
「困ったな…」



具体的な事実が
書かれていないため、
状況が分かりにくい…



✓ 具体性に欠ける

- 「いつ・どこで・誰が・どのように」
といった情報が抜けており、
状況が分かりにくい状態。



いつ?



どこで?



誰が?



どのように?

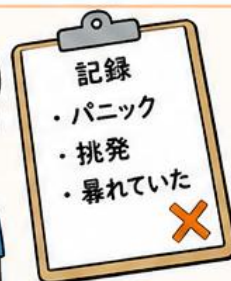
情報が不足していると、
後から見ても
状況が分かりにくい…



✓ 抽象的な言葉を使っている

- 行動を「パニック」「挑発」などの
ラベルで表現してしまい、
具体的な動作が記述されていない。

パニックを
起こした…
挑発してきた…



ラベルでの記録では、
具体的な動作や
背景が分からない…



記録は「**事実**」を、**具体的に**、**客観的に**書くことが大切です！
情報共有の質が高まり、チーム全体の支援力向上につながります。



情報共有のベースとなる記録

好ましくない記述例

「今日は
大変だった」



「(対象者が)
パニックになった」



「支援員も
対応に困った」



「(対象者が)
挑発してきた」



何が問題か(不足している点)

➡「何が? 誰が?」が不明で、
具体的な状況が共有できない。



➡具体的な行動(叫ぶ、叩く、
座り込む等)が分からないため、
NGな表現。



➡支援者の主観的な感想であり、
対象者の具体的な状態像を
伝えていない。



➡支援者の解釈(主観)が入っており、
客観的な事実ではない。



事実＝客観的に見た「**具体的な行動**」を記録することが、
チームでの**正確な情報共有**と、**適切な支援**につながります!



まとめ

- 「本人を変える」のではなく「支援と環境を整える」

➡ 課題となる行動の理由は本人の中にあるのではなく、
周囲の状況や結果との関係性にある。



- 「正しい状態像」がつかめれば、支援は変わる

➡ 客観的な記録で「解像度」を上げることで、
一人ひとりに合った適切な個別支援が実現する。



- チームアプローチで組織の力を最大化する

➡ 一人の気づきをチームに還元し、
全員で同じ方向を向いて歩んでいきましょう。



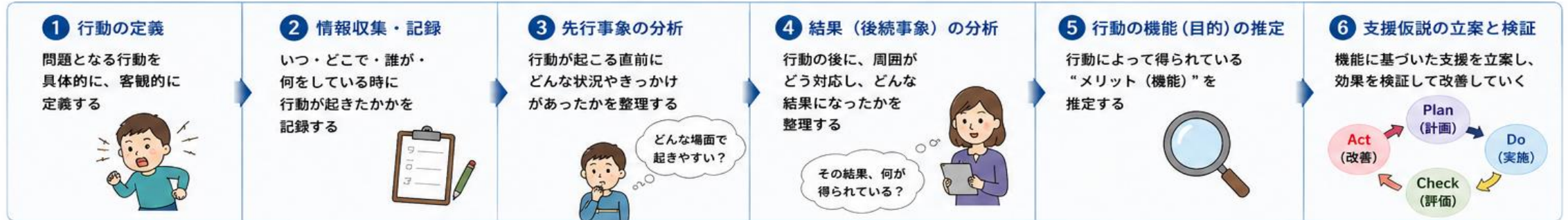


参考までに



機能的アセスメントとは？

行動の「きっかけ（先行事象）」と「結果（後続事象）」を分析し、行動の“目的（機能）”を明らかにする方法です。



1. 行動の定義（今回の事例）

飛び出し行動

活動中に席を立ち、事業所の出入口に向かって走っていく行動とする。



2. 情報収集の方法

- ・ABC記録（先行事象・行動・結果）を中心に記録
- ・スカッタープロットで「いつ起きやすいか」を可視化
- ・職員の聞き取り・本人の様子（表情・発語）も整理



ABC記録



スカッタープロット



聞き取り・観察

3. ABC分析の例（抜粋）

場面（先行事象：A）	行動（B）	結果（後続事象：C）	考えられる機能（目的）
活動の切り替え場面（休憩から活動へ） 「次は〇〇だよ」と声かけ	飛び出し行動	職員が追いかける・声かけ 活動を中断→注目が集まる 本人の要求が通る（帰宅できる）	① 注目の獲得 人の関わりや注目を得たいと
昼食前後（12:00～13:00） 見通しの提示が不十分	飛び出し行動	昼食が早くなる・帰宅できる （本人の経験として強化）	② 活動の回避・逃避 嫌な活動や見通しの不明確さから逃れたい
やりたくない活動の場面（課題が難しい・長い）	飛び出し行動	課題から逃れられる （嫌な活動の回避ができる）	② 活動の回避・逃避 嫌な活動や見通しの不明確さから逃れたい
活動中に注目が少ない場面（関わりが少ない）	飛び出し行動	職員が関わってくれる・注目してもらえる	① 注目の獲得

4. 機能（目的）の推定

分析の結果、飛び出し行動の主な機能（目的）は以下の4つが関係していると考えられた。

① 注目の獲得

職員の注目や関わりを得ること



② 活動の回避・逃避

嫌な活動や見通しの不明確さから逃れること



③ 物・活動の獲得

帰宅・休憩・好きなことなどを得ること



④ 感覚的・自動的強化

緊張の緩和や刺激的獲得（落ち着く・スッキリする）



5. 支援仮説（機能に基づいた支援の方向性）

① 注目の獲得が目的の場合

→適切な注目の機会を増やし、注目を得る手段を教える

- ・関わる時間を確保する
- ・「できた時の注目」を増やす
- ・コミュニケーション支援（要求の伝え方を教える）



② 活動の回避・逃避が目的の場合

→活動の構造化・難易度調整・見通しの提示を行う

- ・活動A/Bに分ける
- ・課題の簡易化・段階づけ
- ・見通し（スケジュール）提示
- ・切り替えの予告・カウントダウン



③ 物・活動の獲得が目的の場合

→帰宅や休憩のルールを明確にし、適切な方法で獲得できるようにする

- ・帰宅の流れを視覚化
- ・休憩のタイミングを決める
- ・要求カードやシンボルを活用



④ 感覚的・自動的強化が目的の場合

→感覚の調整や代替行動を用意する

- ・感覚調整の時間を確保
- ・体を動かす活動を取り入れる
- ・落ち着ける環境づくり（静かな場所・クールダウン）



6. 支援の実施と検証（PDCAサイクル）

Plan (計画)

仮説に基づき支援計画を立てる



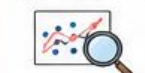
Do (実施)

支援を実施する



Check (評価)

記録・観察で効果を確認する



Act (改善)

支援を改善し、継続していく



ポイント！

- ✓ 行動には「理由（目的）」がある
- ✓ 行動をやめさせるのではなく、目的を満たす「別の方法」を教える
- ✓ 観察・記録・分析を繰り返し、本人に合った支援をつくる



機能的アセスメントを行うことで…

行動の背景にある「意味」を理解し、本人にとって必要な支援につながります！

スキャッタープロットとは？

「いつ・どこで・どの時間帯に行動が起きやすいか」を見える化する方法

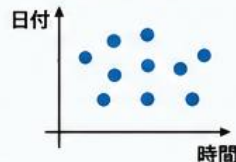
1

行動が起きた
時間を記録する



2

時間を横軸に、
日を縦軸にして
プロットする



3

行動が起きやすい
時間帯の「かたまり」
を見つける



4

環境や活動との
関連を分析する



5

支援の仮説を立て、
環境や支援を
見直す



スキャッタープロットからわかること

- ✓ 行動が集中して起きる時間帯
- ✓ 活動の切り替え時に起きやすいか
- ✓ どんな状況のときに起きやすいか
- ✓ 支援の改善ポイント



「行動を止める」ではなく
「行動が起きにくい環境をつくる」
ことにつながります！

スキャッタープロットの例（行動記録の可視化）

グラフの見方

横軸：時間（0時～24時）

縦軸：日付

●：行動が起きた時間

このグラフを見ると…

- ✓ 10:30～11:30頃に多い
- ✓ 12:00～13:00頃に特に多い
- ✓ 15:00以降は少ない

特定の時間帯に
集中して起きていることが
わかります！



今回の事例で見えたこと（分析結果）



昼食前後（12:00～13:00）に
行動が集中している

➡ 昼食の見通しや空腹、
「帰宅の連想」が影響の可能性



活動の切り替え時
（活動→休憩／休憩→活動）に
行動が起きやすい

➡ 切り替えの見通し不足や
待ち時間が影響の可能性



見通しが曖昧な場面や
選択肢が不明確な場面で
起きやすい

➡ 不安や混乱が高まり、
行動として表出している可能



昼食後＝帰宅という
経験の連鎖ができています

➡ 過去の経験が現在の
行動を強めている可能性



分析結果をもとに行った支援（環境調整・構造化のポイント）

見通しの明確化

シンボル・タイムテーブルで
「今、何をやるのか」を
視覚的に提示



活動の再構造化

活動をA・Bの2つに分け、
選択しやすく、
取り組みやすくした



切り替え支援の強化

切り替えの予告・カウントダウン・
途中のリマインダーで
見通しを持ちやすくした



おわり

休憩の考え方を整理

休憩の概念を見直し、
本人にとって分かりやすい
形に再構成した



環境・動線の調整

動線の見直しや席の配置変更で
刺激を減らし、
落ち着ける環境にした



強化子の活用

取り組みが継続できた時に
本人の好きな遊びで
フィードバックした



その結果…

- ✓ 飛び出し行動の減少
- ✓ 着席・活動の安定
- ✓ 切り替えの改善
- ✓ 本人の安心感の向上
- ✓ 生活の質（QOL）の向上



ご清聴ありがとうございました。